

エイズ・結核・マラリアのない
未来に向けて日本の力を



FGFJレポート

グローバルファンド日本委員会
Friends of the Global Fund, Japan
Joining the Fight Against AIDS, Tuberculosis and Malaria

Summer 2019
<http://fgfj.jcie.or.jp>

No.
20

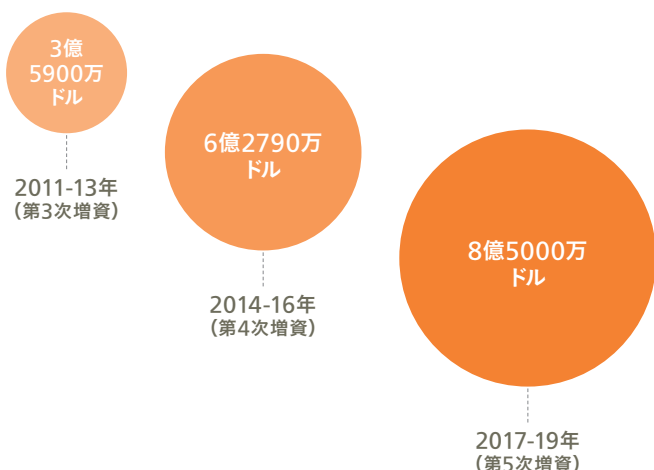


The Global Fund / Andrew Esiebo

グローバルファンドと協働する民間企業 企業リソースを活かす連携 5つの事例

グローバルファンドの資金源の大半は政府の拠出金です。しかし、企業・財団・団体などの民間からの拠出も重要で、その比率は、増資の回を重ねるごとに高まっており(図1)、2002年1月のグローバルファンド創設から今年(2019年)8月初めまでの累計の拠出額は、27億2200万ドル(約2930億円)に上ります。近年は、先進国の企業のみならず、三大感染症の流行が深刻なアジア・アフリカ地域に経営の基盤を置く企業からも、民間の活力を生かした社会貢献意欲が高まっています。また、資金的な貢献以外にも、人材育成や流通網整備へのノウハウ提供、グローバルファンドとの共同投資など、企業のリソースを活かす様々な連携のパターンがあり、今後も拡大していく見通しです。

図1:各増資における民間セクター(企業・財団・団体)からの誓約額



Case 1 (RED)——真っ赤なブランドでアフリカのエイズ対策を支援

(RED)は、ロックバンドU2のボノと社会活動家ボビー・シュライバーの呼びかけで2006年に発足したグローバルなコース・マーケティング(社会貢献につながる販売活動)の仕組みです(図2)。(RED)に参加する企業が、共通の赤を基調としたオリジナル商品「プロダクト(RED)」を販売し、その収益の一部を(RED)を通じてグローバルファンドに寄付し、アフリカ8か国のエイズ対策事業を支援しています。集められた寄付は、(RED)やグローバルファンドが管理費を差し引くことなく、100%が現地の事業に回ります。これまでの14年間で(RED)が集めた寄付は6億ドル(約648億円)に達しました。

グローバルファンドを通じて、HIVの予防、検査、治療、母子感染の予防、エンパワメント、思春期の女性の支援などに使われ、すでに140万人がその恩恵を受けています。2019年7月現在、アップル、アマゾンをはじめ29社が参加。日本ではアップル製品が広く購入できます。ボノは「自社の持つブランド企画力とマーケティングやネットワークを活用し、企業とグローバルファンドの双方に利益のある持続的な関係を生み出していく」と説明しています。

図2:(RED)HPより



Case2 ユニリーバ——思春期女性の自己肯定感を高める



The Global Fund / Karin Schermbrucker

日用品や食品のグローバル消費財メーカーであるユニリーバは、2018年1月の世界経済フォーラム(ダボス会議)でグローバルファンドとのパートナーシップを発表しています。その中心となるのは、ユニリーバが開発した教育プログラム「Confident Me」です。

ユニリーバは長年にわたり、思春期の子どもたちが体形や容姿について他人の意見に惑わされず自信を持ち、自己肯定感を高められるよう、子どもたちや教師向けのプログラムを世界中で提供してきました。グローバルファンドとのパートナーシップは、この「Confident Me」を、グローバルファンドの支援で進められている思春期女性のエイズ教育と組み合わせるもので、現在、パイロット事業が南アフリカ共和国で進行中です。南アフリカでは、15～24歳の思春期女性と若い女性のHIV陽性率は同年代の男性に比べ3.3倍高く、また、新たにHIV感染する確率は5～8倍高いと推定されています(注)。性暴力、年上の男性パートナーからの感染が多く、その背景には保守的なジェンダー規範、教育機会の欠如、貧困など複雑な社会要因が絡み合っています。

グローバルファンドは教育やエンパワメントなどによる意識改革を含めた総合的なプログラムの支援を強化しており、ユニリーバの自己肯定感を高めるプログラムによって、思春期女性の健康意識を高め、HIV感染のリスクを避ける行動変容を促すことが期待されています。グローバルファンドとユニリーバは、2018年～20年の間に、それぞれが500万ドル(約5億4000万円)をこうした事業の支援にあてることを合意しています。

Case3 武田薬品工業株式会社——保健システム強化にコミットする最長のパートナー

民間企業の中で、グローバルファンドと最も長い間にわたりパートナーシップを結んでいるのが、武田薬品工業株式会社です。2010年から19年までの10年間、毎年1億円をグローバルファンドに寄付し、ナイジェリア、タンザニア、ケニアで三大感染症対策を通じた保健医療人材の育成・強化を助けてきました。今年の6月には、その後継プログラムとして、2020年からの5年間で総額10億ドルの寄付を発表しました。グローバルファンドの第6次増資(2020年～2022年)に対する民間企業からの初の拠出表明であり、世界中の企業の積極的な資金貢献を促すと高く評価されています。

保健サービスを一人でも多くの人に届ける上で、エントリーポイントとなるのが妊婦の「健診」です。新しい寄付は、アフリカの数か国において産前・産後健診に質の高いエイズ、結核、マラリア対策を統合し、母親と子どもの健康を改善することを目的としています。グローバルファンドが感染症以外の保健課題の事業と連携し、より良いサービスをより多くの母子に届け、対策の費用を削減することで、保健システムを強化しユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の達成に貢献することを具体的に示す例となることが期待されています。



The Global Fund / Andrew Esiebo

Case4 エコバンク——財務管理の人材を育てる

アフリカ初の民間銀行であるエコバンク(Ecobank)は、2013年からグローバルファンドとパートナーシップを組み、アフリカ各国で財務管理の人材を育成しています。年間40億ドルにおよぶグローバルファンドの支援のうち約65%が

サハラ以南アフリカへの支援であり、圧倒的に多くの資金が流れています。各国の組織が適切・効果的に資金を管理することは、予防や治療などの保健医療サービスをより効果的に提供することに直結します。

エコバンクはアフリカの30か国以上でビジネスを展開する金融機関としての強みを生かし、グローバルファンドの支援を受けて感染症対策プログラムを実施する現地の政府機関やNGOなどに対し、財務管理スキル向上のための技術支援や、会計士などの専門家による研修プログラムを開発し、人材育成のための費用を支援しています。ナイジェリアでは14の団体が研修を受け、研修終了後も専門家による予算管理、現金出納、差異分析、財務報告、資産管理、支援先管理、収支予測などの支援を受けることができます。ナイジェリアで開始した研修事業は、現在、セネガル、南スーダンにも拡大しています。



グローバルファンド支援プログラムの財務管理能力向上のため、エコバンクのスタッフから研修を受けるダミアン財団のスタッフ(ナイジェリア) The Global Fund / Andrew Esiebo

Case5 タタ・トラスト——自立に向けインド国内の資金を集める

インドは、世界の結核高負担国の一つで、マラリアの負荷も高い国です。モディ首相のリーダーシップのもと、政府の感染症対策はこれまでにないほど強化されてきていますが、並行してインド国内の民間資金も大きな役割を果たすようになってきています。インドを代表する企業の一つであるタタ・グループは、グローバルファンドとの協働で「インド健康基金」(Indian Health Fund)を2016年に立ち上げました。タタ・トラストからの1500万ドル(約16億2000万円)の拠出をシードマネーに他のインドの民間資金を募る基金で、グローバルファンドの戦略的サポートを受け、インドの結核とマラリアの流行を終息させるための革新的な技術やアイデアを持つ企業や団体、研究者を支援しています。5年間で1億5000万ドル(約162億円)規模を目標に、グローバルファンドの支援を受けている事業に追加的に共同支援を行い、それ以外の事業にも資金支援やスケールアップにつなげる技術支援をしています。グローバルファンドは、中所得国が国際支援からの自立に向けて持続可能性を高める準備を後押ししており、国内資金を集めるこうしたメカニズムの構築はその一つの手法となっています。

●参考資料

グローバルファンドウェブサイトおよび資料／事例各社のウェブサイト／国井修『世界最強組織のつくり方—感染症と闘うグローバルファンドの挑戦』(2019年)

*為替レートは1ドル108円で計算

注)Simbayi LC et al. 2017. South African National HIV Prevalence, Incidence, Behaviour and Communication Survey.; Johnson LF et al. 2016. Global Health Action.

紹介 | SDGsの時代の組織論

『世界最強組織のつくり方—感染症と闘うグローバルファンドの挑戦』

グローバルファンドの戦略・投資・効果局長として、国際政治と感染症対策の現場で活躍を続ける国井修氏が新著『世界最強組織のつくり方—感染症と闘うグローバルファンドの挑戦』(ちくま新書、900円+税、2019年8月)を刊行しました。

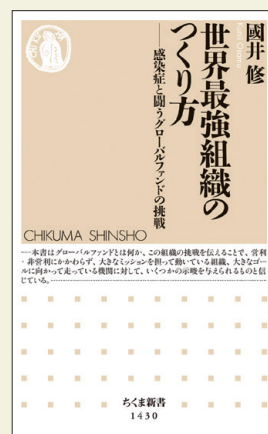
『1990年代に猛威を振るったHIV、結核、マラリア。それら三大感染症と闘うために生まれ、コフィ・アナン、ビル・ゲイツ、ポノ等から絶大な支援を受けてきた国際基金グローバルファンド。その官民共同の新たなビジネスモデルは「21世紀のグローバルヘルスの大いなる革新」と呼ばれ、「世界最強の国際機関」とも称される』(本のカバーから)

グローバルファンドはなぜ、「世界最強の組織」なのか。医師として、そしてフィールドワーカーとして、長い経験の

蓄積をもつ国井氏ならではの豊富なエピソード、そして実際の活動や成功事例を交えた解説により、その謎が「ああ、そうなのか」と納得できる快著です。

グローバルファンド日本委員会15周年記念事業の一環として出版。人材活用(人材・リーダー育成、採用)などの貴重な指摘も多く、SDGs(持続可能な開発目標)時代の組織論としても読むことができます。

COLUMN





わたし日本人とグローバルファンド vol.6

ドナー国側市民社会の人間としての責務

稲場雅紀さん NPO法人アフリカ日本協議会(AJF) 国際保健ディレクター

アフリカ開発会議(TICAD)に向けアフリカ連合委員会と連携強化のミーティング(エチオピア・アディスアベバ)

グローバルファンド理事会には、先進国NGOとしても1票がある。2004年、日本人活動家として初めてそのNGOチーム10人に加わり、東アフリカ・タンザニアの会議場へ行ったとき、欧米のリーダー活動家に指を突きつけられた場面をいまでも忘れない。「そんなつもりでここへ来られたら困るんだ!」。日本からたった一人で出かけて行った36歳の青年は、色を失った。

2002年、それまでのゲイ活動家としての性的マイノリティやエイズへの知見、活動歴が買われてアフリカ日本協議会へ入職。新たなフィールドとなったアフリカへ通うと、現地に展開するグローバルNGOの活動を目の当たりにした。「2000年代以後、欧米のゲイ・レズビアン活動家たちは、グローバルなエイズ・アクティビズムへ参入していました」。日本ではまだ見えていなかった、ゲイ活動家の「その後」だった。

世界的に活躍するラディカルな活動家たちとの人脈が広がるなか、グローバルファンドの先進国NGO理事団へ声がかかった。「軽い気持ちで受けたら、会議直前にもすごい量の資料が送られてきた。どうせみんなも読んでないだろうと思って行ったら、怒鳴りあげられたという始末です」。

理事会の舞台裏は激烈だ。「欧米のドナー国が、調査官や大統領直属オフィサーを連れてきて、途上国側の保健大臣や活動家を裏で分断したり味方にしたり。先進国NGO側が、

実施国側や当事者NGOを支え、後押しし、ドナー側の行政官や専門家を相手に激烈な戦いをするのですから、医療・医薬でも国際情勢でもかなり勉強しないと立ち向かえない」。ある年の団代表は、「今回の理事会はFIGHT TO HELLだ、このDOG FIGHTを勝ち抜こう」とゲキを飛ばしたという。

そんな現場に5年、かかわった。「当時は英語もまだまだ。資料を予習しても予習しても、ついていくのがやっと。最後まで辛かった」と振り返る。しかし、NGO間に、そして政府側にも、日本人活動家マサキへの信頼とネットワークは培われていった。「その後も保健や国際協力のアドボカシーなどで、直接・間接にグローバルファンドには市民社会側の人間として関わり続けています」。

なぜ関わるのか。「日本政府が“きちんと”責任を果たし、グローバルファンドを通じて世界が少しでも公正なものになること。それがドナー側本国にいるものの責務」。現場でときに政府側の人との対立も辞さなかった。同時に、世界で出会ってきた欧米の活動家が、自国の枠を越え、彼らなりの世界観をもって市民社会の運動を構想し、行動していることにも注目する。「30代、40代は“武闘派”で暴れるのもいいが、私も50歳。違う動き方を考えないといけないと思う」。タフな活動家が、ふととまどいを見せた瞬間だった。

(インタビュー全文はホームページに掲載しています)

FGFJトピックス



「アフリカのヘルスケア」を知る SwitchPoint Shibuya

グローバルファンドと日本国際交流センター(JCIE)、米国のイントラヘルス・インターナショナルによるTICAD7パートナー事業SwitchPoint Shibuya(スイッチポイント渋谷)。人道問題の解決に向け最もイノベーションが進む「アフリカのヘルスケア」、なかでもエイズ、結核、マラリア対策とそれを支える保健医療人材がテーマの参加型ネットワークイベントです。

感染症問題に取り組む若手活動家、起業家、イノベーターが8月31日(土)15時から渋谷EDGEof(エッジ・オブ)でアフリカ発の技術や未来への想いを参加者と探求します。

詳細と申し込みはこちら▶



FGFJとJCIE

グローバルファンド日本委員会(FGFJ)は、世界エイズ・結核・マラリア対策基金(グローバルファンド)を支援する日本の民間イニシアティブです。グローバルファンドに対する理解の促進と、感染症分野における日本の国際貢献の強化のために各種会合や調査、情報発信を行なっています。

民間外交のパイオニアである(公財)日本国際交流センター(JCIE)のプログラムとして運営されています。



FGFJレポート

2019年8月26日 No.20

編集・発行：公益財団法人 日本国際交流センター(JCIE)

編集発行人：伊藤聡子(グローバルファンド日本委員会事務局長)

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目1番12号 明産溜池ビル7F

Tel: 03-6277-7811(代表)

Mail: fgfj@jcie.or.jp http://fgfj.jcie.or.jp

編集協力：宮田一雄、永易至文、加納啓善

Copyright ©日本国際交流センター 無断転載禁止